

大学運動部員の退部と継続に関する研究

—退部希望継続者における一考察—

スポーツ科学課程

98-234 須崎 藍

I. 研究の動機及び目的

大学の運動部は種々の教育的機能を持ち、社会的役割という面においても大切な機能を内包しているものである。しかしながら、大学生の運動部離れ、大学における運動部の縮小化が問題となっている。上杉¹⁾は、「練習で体験する苦しみは、勝敗に関係なく日常生活に役立つ何かをつかむことにつながり、人間的に成長するのである」と述べている。また、彼は、「このような価値意識は、多くの学生が肯定的であり、現実でも多くの人が保持している価値意識である」と指摘している。しかし、学生の運動部離れという現象から推測すると、そのような価値意識を認識している学生は減っているのではないかと考えられる。そこで、現在大学の運動部に所属する学生が、部活動にどのようなことを求めているのかを知ろうと思ったのが本研究の発端である。よって、本研究では運動部に所属する学生がどのような気持ちで部活動に参加し、継続や退部をどのように思っているのかを明らかにすることを目的としている。

II. 研究方法

1、調査方法

質問紙による調査

2、調査対象

金沢大学運動部員

3、調査期間

平成13年10月30日～平成13年11月23日

4、回収数

211部 (70.3%)

5、調査内容

- ① 対象者の属性
- ② 部活動の状況
- ③ 部活動に入部した動機
- ④ 練習に参加する動機
- ⑤ 部活動の継続
- ⑥ 退部を思いとどまった理由

6、分析方法

各調査項目において、得点化し、平均尺度得点を求めた。また、男女差を比較するために、それらの平均尺度得点を比較した。なお、比較は対応のないt-検定によって行い、有意水準5%とした。さらに、因子分析を行い先行研究との比較検討を行った。因子分析の手順は、質問項目に対し共通性の推定値を1.0とした主因子法によって因子を抽出した後、1.0以上の因子に対しノーアルバリマックス法による直交回転を行った。解釈・命名は、回転後の因子負荷量.500以上有する項目を対象にした。

Ⅲ. 結果と考察

1) 入部動機（現在の運動部に入部した動機やきっかけ）

平均値の順位づけの結果、入部動機においては、「体を動かすことが好き」「うまくなりしたい」「種目が好き」「楽しみたい」「勝つことが好き」などの自発的な動機の項目が上位に位置した。また、「入らされた」「やったことがないから」「あこがれの先輩がいるから」「友達が入ったから」などの自発的でない動機の項目が下位に位置した。次に、男女差をt-検定によって検討した結果、「競争することが好き」「体力をつけたい」「ほめられたい」の項目において、男子のほうが有意に低く、「友達に誘われた」「入らされた」「部からの勧誘があった」の項目において女子の方が有意に低かった。このことより、女子よりも男子の方がより積極的に部活動に入部したといえる。

さらに、因子分析した結果、「技術・技能の向上」「社会的承認」「人格形成」「欲求充足」「集団関与」「受身」「新奇体験」の因子が抽出された。稲地²⁾らの研究と比較検討した結果、「社会的承認」「集団関与」「受身」の因子は、先行研究では抽出されていなかった。また、「技術・技能の向上」の因子は高い寄与率を示していたことから、入部に関する中核的な因子であると考えられることができる。

2) 参加動機（日々の練習に参加している動機やきっかけ）

平均値の順位づけの結果、参加動機においては、「うまくなりしたい」「体を動かすことが好き」「種目が好き」「技術を向上させたい」という項目が上位に位置し、入部動機とほぼ同じ結果となった。上位に技術や技能の上達の項目がいくつも入っていることから、「技術・技能の向上」が参加動機の中核的な要因であるといえる。また、「友達に誘われた」「あこがれの先輩がいるから」「理由はない」「両親が望んでいる」という消極的な項目が下位に位置する。次に、男女差をt-検定によって検討した結果、「競争することが好き」「勝つことが好き」の項目において男子が有意に低く、「やせたい」「あこがれの先輩がいるから」という項目において女子が有意に低かった。さらに、「楽しみたい(5位)」及び「技術を向上させたい(4位)」の項目が平均値の順位づけにおいて上位に入っており、「社会的な評価のため(34位)」は平均値の順位づけにおいては上位に位置していない。これらのことより、本研究の対象者においても Wankel³⁾らの研究同様、外発的な要因よりも内発的要因が「楽しさ」の重要な要因になると考えられる。

さらに、因子分析した結果、「技術・技能の向上」「社会的承認」「欲求充足」「人格形成」「集団関与」の因子が抽出され、入部動機と同じであった。以上の結果より、入部動機から参加動機への変容はあまりなく、入部動機と同じく「技術・技能の向上」などという積極的な要因が参加動機であるといえる。また、対象者においては「技術・技能の向上」が楽しむための一要素であり、逆にいえば、「技術・技能の向上」なくてはスポーツを楽しむことができないともいえる。このような傾向は勝利至上主義傾向が強いほど顕著であり、現在の部活動の問題である。このような考え方が部活動離れを引き起こす一要因であると考えられる。

3) 退部希望別の参加動機

退部したいと思いつながら継続している者（以下、退部希望継続者と略す）110名と、退部したいと思いつたことがない者（以下、積極的継続者と略す）101名に分けて分析を行った。「あなたは部活動をやめたいと思いつたことがありますか。」という質問に対し、「いつも」あるいは「ときどき」思う（思いつたことがある）と答えた人が退部希望継続者、「あまり」あるいは「全く」思わないと答えた人が積極的継続者とする。（表1）

その結果、約半数の人が退部したいと思ったことがある、退部希望継続者であることがわかった。

表1 退部

	度数	%
いつも思う	7	3.3
ときどき思う	103	48.8
あまり思わない	59	28.0
全く思わない	42	19.9

退部希望継続者を対象に因子分析した結果、「技術・技能の向上」「欲求充足」「社会的承認」「集団関与」「人格形成」の因子が抽出された。次に、積極的継続者を対象に因子分析を行ったが、新たな因子は抽出されなかった。さらに、退部希望継続者と積極的継続者の平均値のt-検定によって検討した。その結果、「練習が好き」という項目のみ積極的継続者のほうが有意に低かった。

以上のことより、退部希望継続者、積極的継続者ともに楽しむために「技術・技能の向上」を大きな目的とし日々の練習に参加しているといえる。しかし、両者の大きな違いは「練習が好き」と思っているかどうかである。部活動の大半を占める練習を好きと思えるかどうかは、部活動を続けていくなかで退部を誘発する大きな要因といえよう。そのため、常に充実感や達成感、また、やりがいのある練習計画を立てる必要がある。

4) 退部誘発要因 (退部したいと思った要因)

平均値の順位づけの結果、退部誘発要因においては、「楽しくない」「自由な時間がほしい」「能力が上がらない」の項目が上位に位置する。つまり、入部動機や参加動機において上位に位置した動機が達成されなかったときに退部を考えるといえる。先行研究において比較的共通にみられる退部誘発要因として、「人間関係の軋轢」「身体的理由」「練習のつらさ」「他にしたいことがある」「勉強との両立の困難さ」をあげることができる。本研究においても「練習がハードでつらい(10位)」「他にしたいことができた(9位)」「勉強との両立が困難(7位)」が上位に順位づけされている。しかし、「人間関係の軋轢」に関する項目は、上位に位置せず先行研究と異なる結果となった。

さらに、因子分析の結果、「技術・技能の停滞」「他への興味・関心」「外的障害」「人間関係の軋轢」「非認知」の因子が抽出された。稲地らの研究と比較検討した結果、「人間関係の軋轢」の因子は先行研究では抽出されていなかった。

以上の結果より、運動部所属者が部活動を退部しようと思うときは、「楽しくない」ときや「技術・技能の停滞」したときであることがわかった。つまり、入部動機や参加動機で上位にきた要因が達成されなかったときに退部したいと思うということになる。よって、入部時から部活動に求めているものはあまり変わらないといえる。

これらのことより、運動部に入部し友達や仲間ができるだろうが、「楽しむ」ことや「技術・技能の向上」以上の目的を見出すことはできないと考えられる。また、「練習が好き」という項目において、退部希望継続者と積極的継続者に有意な差がみられたとおり、退部の誘発要因には練習が大きく起因しているといえる。よって、退部希望継続者を減らし積極的継続者を増やすためには、スランプなどの技術や技能が停滞しているときでも、練習が好きで「楽しさ」を感じられるような部活動の運営が必要といえる。競技志向の強い運動部活動において、楽しく思えるような練習をすることは難しいと思えるかもしれない。しかし、本研究で明らかになったとおり、技術や技能の向上こそが「楽しさ」を感じることのできる最も大きな要因である。逆にいえば、「技術・技能の停滞」を感じるときは部活動を楽しくないと思っているときであり、退部を誘発する大きな要因である。

5) 退部を思いとどまる要因

平均値の順位づけの結果、途中でやめて後悔したくない(1位)「そのスポーツ種目が好き(2位)」「勝つことのよろこびがある(3位)」「自分をきたえるため(4位)」「友人の反対とはげましがある(7位)」であった。青木⁴⁾は、退部を思いとどまる要因として、「友人(先輩)の存在とはげまし」「途中でやめて後悔したくない」「そのスポーツ種目が好き」を3大要因としてあげており、本研究とほぼ同じ結果であった。さらに青木は、女子においては「友人のはげまし」84.3%を占め、女子の依存的・同調的な性格傾向を指摘している。本研究においても男女の差をt-検定によって検討した。その結果、「友人の反対とはげましがある」という項目が女子のほうが有意に低かった。このことから、青木の報告と同様の結果であるといえよう。

さらに、因子分析の結果、「社会的承認」「種目への執着」「他者のはげまし」の因子が抽出された。以上ことより、「楽しさ」や「技術・技能の向上」といった目的は変わらないにしても、友人という存在は必要不可欠であるといえる。よって、部活動の人間関係を豊かにすることも大切であると考えられる。

IV. 結論

本研究では、継続と退部に影響する要因を明らかにすることが目的である。そこで、本研究の課題をもとに結論を述べる。

- ①入部動機・参加動機においては、楽しむことが最大の目的であり、そのために「技術・技能の向上」が主な要因であることがわかった。退部誘発要因においては、「技術・技能の停滞」や「楽しくないとき」が主な要因であった。つまり、運動部所属者が入部時から部活動に求めているものは変わらず、それが達成できなくなったときに退部しようと思うことがわかった。
- ②本学の運動部所属者のうち、退部希望継続者は52.1%、積極的継続者は47.9%であった。つまり、約半数の人が退部を考えながら部活動を行っていることになる。さらに、退部希望継続者と積極的継続者は、参加動機において「練習が好き」という項目に有意な差がみられた。つまり、部活動の大半を占める練習に退部と継続の要因が潜んでいるといえる。そのため、常に積極的に部活動に参加していくためには、だれもが達成感や充実感を感じることでできる練習を行っていく必要があるといえる。
- ③退部を思いとどまる要因としては「社会的承認」「種目への執着」「他者のはげまし」の因子が抽出された。また、平均値の順位づけでは、「途中でやめて後悔したくない」「そのスポーツ種目が好き」「勝つことのよろこぶがある」「友人の反対とはげましがある」の項目が上位に位置づけられた。

<引用・参考文献>

- 1) 上杉 正幸：大学生のスポーツ価値意識について—理念型の比較— 香川大学教育学部研究報告 45(1)
- 2) 稲地 裕昭・千駄 忠至：中学生の運動部活動における退部に関する研究—退部因子の抽出と退部予測尺度の作成 体育学研究 日本体育学会 37(1) 1992.6 pp55~68
- 3) Wankel.L・Kreisel.P：Factor underlying enjoyment of youth sport:Sport and age group comparisons. Journal of Sport Psychology 7 pp51~64
- 4) 青木 邦男：高校運動部員の退部を思いとどまる理由と部活動継続に影響する要因 体育の科学 日本体育学会 1990.1 pp65~70